

## 南半球便り（その20）：冬のキャンベラ

6月28日

「さぞかし寒いでしょう？」

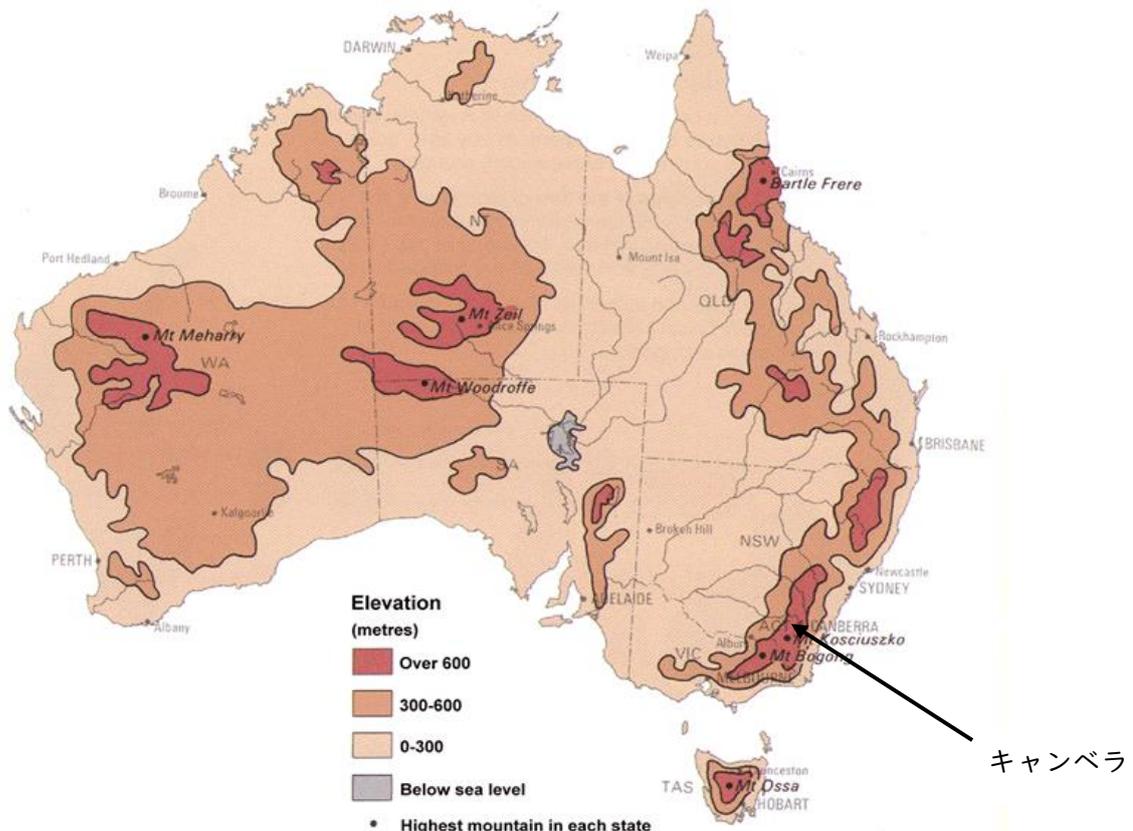
豪州各地を旅して、「キャンベラから来た。」と言うたびに接する質問です。今回は、そんなキャンベラの冬の日に光を当ててみることにします。

### 1. 豪州一の寒冷地

地図で見ると、キャンベラより緯度の高い都市はいくつもあります。南半球で「緯度が高い」というのは、より南、すなわち南極に近いことを意味します。太陽が北から照る南半球の豪州にあっては、南に行けば行くほど、より寒くなるのが通例です。

ところが、天気予報で気温を調べてみると、大抵の場合、南にあるメルボルンやホバートより、キャンベラの気温の方が低いのです。

キャンベラは内陸にあるだけでなく、標高も高い。海拔600メートル。高尾山の頂上で暮らしているような感じででしょうか。冷え込みの厳しさを理解していただけでしょう。



出典：Geoscience Australia（豪州政府機関）ウェブサイト

## 2. 豊穡の陽光

だが、長年、凍てつく信州の冬を経験してきた私のような人間にとっては、キャンベラの冬は優しいものです。それにつけても嬉しいのは、ほぼ毎日陽光が燦々と降り注ぐこと。早朝の気温が氷点下であっても、日中には10度を上回る日が殆どです。

前任地は倫敦でした。夏目漱石、江藤淳をはじめとする多くの知的巨人の心象風景に暗い影を落としてきた彼の地の、冷たい雨がそぼ降る冬と比べれば、明るく健康的なことこの上ありません。

英国と豪州の風景画を比較した美術評論家が、「緑が強く、陽が弱い」英国と「緑が弱く、陽が強い」豪州と端的に表現したことがあります。今に至って、得心しています。

## 3. 「朋、遠方より来る。」

そんなキャンベラの冬をいっそう明るくしてくれたのは、先週末の西郷輝彦ご夫妻の来訪でした。ご本人がユーチューブでの動画で説明しておられますが、前立腺がんを煩ってきた西郷輝彦さんは、日本では認められていない治療方法を求めて遙々シドニーへ来訪。治療の合間を縫って、キャンベラに来られた次第です。

コロナ禍にあって、日本から豪州への客人が極端に少ない中、2-3月にお迎えした旧知の東大公共政策大学院の高原明生教授ご夫妻に次いで、二組目の来客でした。

歌手としても役者としても道を究められた方。オーラが違います。こうした各界の一流人にお会いできるのが大使稼業の醍醐味でもあります。話をうかがうたびに、自らが小賢しげに泳いできた井戸の小ささを思い知ることになります。



西郷輝彦さんとの面会

## 4. キャンベラ再発見

いつもは日頃の忙しさにかまけて、足下のキャンベラをじっくり見る機会が意外とありません。来客をお迎えした機会に、一緒に観光名所（国会議事堂、美術館等）を回ることが出来ました。

突き抜けるような青空の下にゆったりと広がる端正な街並み，それを取り巻く牧草，丘陵地帯。これらを一望の下に見渡すことが出来るテレストラ・タワーからの光景には，さすがに唸りました。



テレストラ・タワーから見下ろしたキャンベラの風景



連邦議会議事堂

キャンベラを斬りに来た（笑）日本のスターに会いたかったのでしょうか？母親の袋からつぶらな瞳をのぞかせる子供を含め，数十頭のカンガルーの出迎えを受けました。西郷夫妻共々，郊外に勢揃いした壮観を目の当たりにしたとき，オーストラリアにいることを実感しました。



たくさんのカンガルー

## 5. 最後に

キャンベラでは市中感染者が11ヶ月も発生していません。交通渋滞や人混みと無縁な市街地では、ストレスも低く抑えられ、クラクションを鳴らす人など、まずいません。湖を街の中心に抱き、緑豊かで陽光煌めくキャンベラには、独特の開放感があります。

ゆったりと時間が流れるキャンベラ。コロナ禍が落ち着いた暁には、多くの観光客を惹きつけることでしょう。

山上信吾